

まんだら通信

第172号 (通巻204号)

平成22年(2010)10月 佛誕2576年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

心を伝える

『長尾地区社会福祉協議会』という集まりがあります。長尾小学校の学区、つまり昔の長尾村が範囲で、催し物はボランティアが切り盛りしています。

根本から西横渚まで、五つの区を順番に回って、年に何回かお年寄りの楽しみ会を開いたりします。

輪投げ、カラオケや保健師さんが指導する柔軟体操など中味はさまざまですが、どこでも一番の人気は幼稚園の子どもたちの遊戯などです。

「私は、川下のじんじろべえの木村まゆみです」などと順々に自己紹介すると「ああ、そうかそうか」と納得して、座が一際盛り上がりします。屋号がわからないと、どこに誰か分かりませんからね。



そして、それぞれお年寄りの後ろから「かあさん おかたをたたきましょ」の歌に合わせて肩たたきをする、その可愛



らしさにまた笑い声で賑やかになります。(右はその頃の区長さんです)

写真は十年ほど前の本郷地区の集まりのもので、子どもたちはもつと大勢いたのですが、カメラに入りきれなかったものと思えます。今年高校を了えた年ごろですね。

昔からこの土地では『半農半漁』で、現金収入が少なかったの

で、大抵の男たちは学校を終えると都会に働きに行きました。そして、手に職をつけて旋盤工

になり、潜水夫になり、大工さんや左官やさんになって故郷に仕送りをしましたね。

結婚すると、お嫁さんは田舎にいて、おじいさんおばあさんと田畑を耕し、海に潜って、暮らしを助けて子育てをしました。

私の育った家も農家でしたから、お嫁さんの重労働や義理の両親への気遣いなど、この目で見て来ました。

この頃のように農業機械などありませんから、重いものも総て背中で運ぶ。乳飲み子を抱えての農作業は、泣きたくなるようなことも沢山あつた筈です。

子どもには、歳に応じて庭の掃除や子守り、日曜日は田畑の手伝いなど色々することがありました。

クワや鎌の扱い方、刃物の研ぎ方や天秤棒で物を運ぶことなど、体で覚えたことは沢山あります。

晩ご飯のあと、囲炉裏の周りで大人の話も聞きました。

「浜田のたつべえ」というキツネの話。おんべえ山で鹿狩りをした神様が、「曲田の小平やーい」と呼んで鹿を縛る縄を持ってきてもらった話など今でも憶えています。

年寄りに繰り返し聞かされたことは「他人さまに迷惑をかけるな」、「恥ずかしいことはするな」、「呼ばれたら大きな声で返事せよ」ということでした。

親と子と孫という家庭だったから教えてもらうことが出来たのだと、今では思っています。

皮肉なことには子育て中の親御さんは、働いて暮らしを守ることに気持ちが傾き勝ちです。

子どもたちの人柄を育てるといふ役割は、自分の家庭、地域を問わず、所謂第一線を退いたお年寄りの出番だと思えますが、如何でしょうか。

お隣の国に限らず、世界中が自分さえよければという我利我利者ばかりのよくな今の世の中で、「相手を思いやって生きる」という、日本人が縄文時代から蓄えて来た美しい心を、私たちの孫や子どももつともつと身に付けることを、心ある世界の人々が待っています。

◆昨日8日は、二十四節気の『寒露』で、降りる露に冷たさを感じる頃の意味だそうです。今年も、いつまでも30度を超える暑さが続いて閉口しましたが、さすがに10月の声とともに、空の色さえ秋らしくなってきました。

◆休刊のお知らせです。来月11月6日から15日まで、10人の人たちと今年も『あそか基金』の奨学生に会いにスリランカに行ってきます。

『まんだら通信』は毎月10日発行ですので、毎月休まず続けてきましたが、予定がぶつかってしまいましたので、11月号はお休みさせていただきます。その代り、というわけでは

ありませんが、12月号でスリランカのご報告が出来ると思います。

◆先月号でお伝えした、著者小田豊二さんのサイン入りの『笑って泣いて、ナミダ涙の大洪水』限定10冊贈呈、はお陰さまですぐにお申し込みがあり、お届けした方々から感動の涙でした、というお礼を貰いました。有難うございました。

◆裏の畑で在来種の日本ミツバチを飼っています。至極おとなしい種類で、手で触っても人を刺すことは先ずないのですが、これを目当てにスズメバチがやってきます。今年は異常に多く、入り口をかじって巣箱の中に入り込んだた

め一群は逃げ出し、別の群れはスムシという天敵に巣を壊され、これも逃げてしまいました。今残っているのは最後の1箱だけなので、何とか元気に冬越しをしてもらいたいと思っています。

◆【ひがなばな科ヒガンバナ属】ヒガンバナ(マンジュシャゲ)。夏の暑さ続きとかで、開花が随分遅れました。早い年は9月の初めには咲き始めますが、今が花盛りですね。タネが出来ない植物で、球根だけで増えるのだそうですね。人里近くにしかありません。 2010.10.09 龍渉



余滴

につぼん人情小噺

三遊亭鳳豊

第五十八話 弔 辞

おかげさまで、『笑って泣いて、ナミダ涙の大洪水!』(MOKU出版刊)が好評で、日本各地を訪れましても、本の話になりますと、「あの本はいい本ですねえ」なんて言ってくださいます。本当にうれしいこととございます。

先日、富ひづるさんという、なんと奄美大島の山間簡易郵便局長さんからわざわざお電話をいただきましたね、「とてもいい本なので、もう一冊手に入れて」娘さんに贈っていただいたそうでございます。奄美大島ですよ。山間という名前ですがね、ここは美しい海に面しているところだそうですよ。近くに「石抱きガジュマル」っていう木がありましたね。ええ、ガジュマルの木が大きな岩を抱いて、「ここから山間の集落だぞ」って知らせてくれているのだそうです。

まあ、何はともあれ、日本各地で生まれた「いい涙の種」が、奄美大島まで飛んでいって、ひづるさんの心まで届いたというのも奇跡だと思っております。起こったことも奇跡なら、それをまた読んでくださった人がいるというのも奇跡です。奇跡が奇跡を呼ぶ。

きつと、また、あなたのまわりでいいことが起こるかもしれません。今日は、北陸・石川県の小松で最近あった話を紹介します。

主人公は、清水まゆ美さんと関本一美さんという五十代前半の奥様ふたり。ふたりは、大変に仲よしだったのですが、話は関本さんが胃ガンになった時から始まります。

普通、胃ガンと言えば、早期発見し、全摘すれば治るケースも多いのですが、関本さんの胃ガンはスキルス性というガ

ンで、細胞の奥深く入り込み、簡単にはガン細胞を取りきれないのだそうです。そのため、関本さんは胃を全摘したのですが、それでもガンは残っている状態で、今度、再発したら、命は危ないと医師から言われていました。

そんな時、清水さんは仲よしの奥さん、関本さんから呼び出しを受けました。「なんだろう?」清水さんは、退院したばかりの関本さんの自宅にうかがいました。

「あら、いらつしやい。ありがとう」「大丈夫なの、寝ていなくて」「うん、今日は気分がいいから。さあ、あがつて、あがつて」

清水さんは案内されるまま、応接間のソファに腰掛けました。紅茶を持って、関本さんもゆつくりと腰をおろします。もともとアイドルのように、かわいらしい奥さんだった関本さんも、さすがに手術の疲れが顔に出ていました。

「あのね、言いくいから、サアッと言っちゃうね。あなたにお願いがあるの。清水さん、私のお葬式の弔辞を読んでくれない?」「弔辞? だって、あなた、退院してき

たばかりでしょ。何言ってるのよ」「ううん、そうじゃないの。お医者さんに言われてるのね。今度、再発したら、死ぬって。だから、元気なうちに、最後のことを決めておきたいのよ。ね、お願いだから」

清水さんは、いくら親友でも「はい、わかりました」とは言えるわけがない。「はい、はい、考えておくれ。今度、返事するね」

ふたりは、別の話題で盛り上がり、その日はそのまま帰りました。でも、清水さんの頭の中は弔辞のことについて「私より親しい人がいっばいいるのに……」。家に戻ってから、清水さんは思わ

ずそうつぶやいていました。

なにしろ、関本さんは、学校の先生もしていた女性で、持ち前の明るさと大変にキュートな容姿で、人気者の奥さんだったからです。

そんな時、清水さんは「聞き書き」という運動に出会いました。「聞き書き」とは、語り手の話したいことを聞いて、テープに取り、語り手の言葉をひとり言のようにしてまとめ、世界で一冊の本にする方法です。

「これなら、弔辞と関係なく、一美さんといろいろな話ができる」清水さんは、そう思い、一美さんの聞き書きをはじめました。子供の頃のこと、愛する夫との出会い、わが子の誕生、大好きな『赤毛のアン』のこと、そして病

気について。やがて、一美さんにガンが再発し、手術が行われました。手術が無事に終わった頃を見計らって、清水さんは一美さんの病室を訪ねました。ところが、病室には一美さんの姿がありません。清水さんは、あわてました。病気が急変したのか、と驚きました。

すると、ニコニコして一美さんが外出から戻ってきたのです。「昨日、手術だったんですよ。そんな体でどこに行ってたの」「ア、疲れた。娘が入っている吹奏楽部が北陸大会に出ることになったのよ。その応援に行ってたの。うまくいけば、全国大会よ」

「ダメじゃない。そんなことして。万が一のことがあつたらどうするのよ」一美さんは、まるで少女漫画の主人公のようなかわいらしい瞳を輝かせて、清水さんにこう言ったのです。「先生から絶対安静って言われたの。『では、安静にしないでいたらどうなる

の?』って聞いたたら、『死ぬ』って。だったら、私、娘の応援に絶対行くって決めたの。どうせ、死ぬんだもの。だったら、やりたいことをやって死んだほうがいいと思つて。そうそう、この話も書いておいてね」

それから三ヶ月後、一美さんは亡くなりました。清水さんは、約束通り、弔辞を読みました。多くの人のすすり泣きが聞こえます。

でも、一美さんの明るい言葉がたくさん清水さんのテープに残っています。いま、清水さんは一美さんが元気だった時のおしゃべり集を一冊の本にまとめます。なぜなら、一美さんは、この本の中でずっと生き続けるからです。

あなたは、親友から「弔辞をお願いね」と言われたら、どうしますか。そうそう、一美さんのお嬢さんの所属する吹奏楽部は全国大会で金賞を受賞しました。

今月も三遊亭鳳豊師匠と、MOKU出版さんのご好意に甘えて転載させていただきますました。

『正論』という雑誌があります。産経新聞社発行の月刊誌ですが、数多いオピニオン誌の中で、日本と世界の正しい姿を理解する格好の雑誌です。今、定期購読キャンペーン中だそうです。一冊七百四十円のところ、今申し込むと十三ヶ月分八千八百八十円(一冊当たり六八三円)のことです。

まだ読んでいないという方は、本屋さんで手に取ってご覧下さい。以前から読んでいますが、世の中が明るく見えるようになりました。